

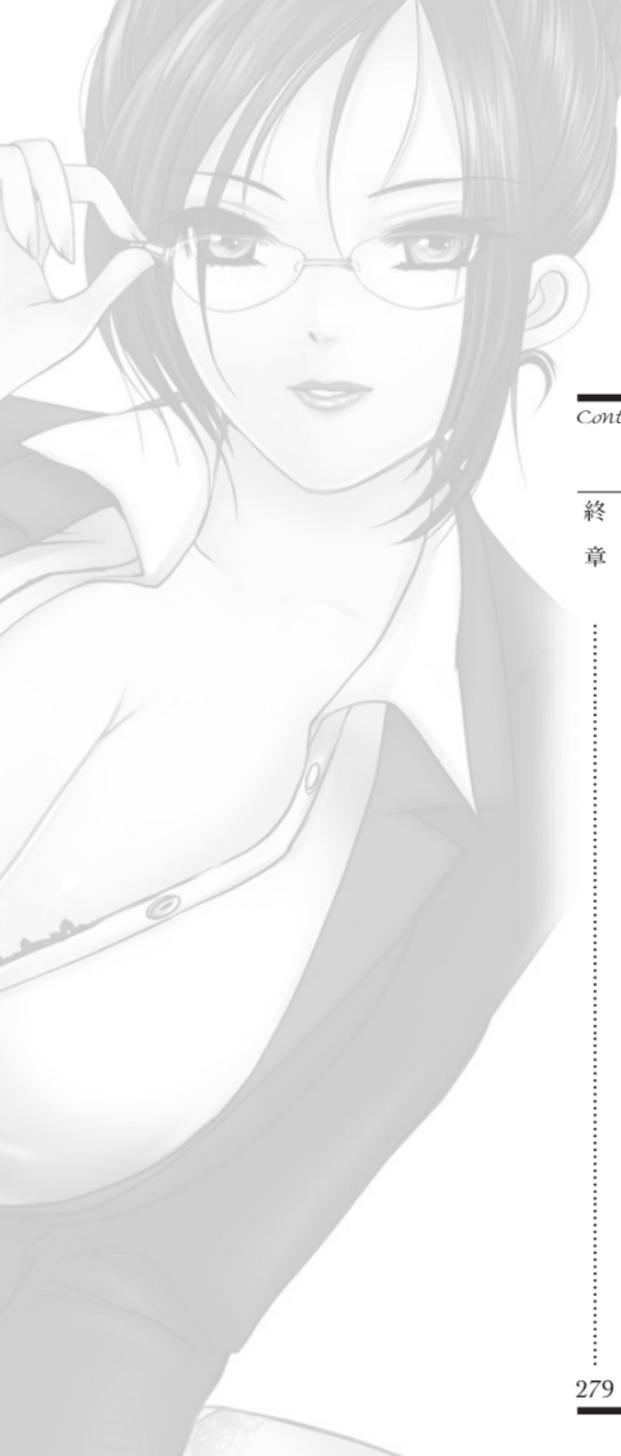


女教師の 童貞指導

岡下誠
挿絵／英田舞

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

終章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章	序章
.....	生徒たちの前で.....	十年ぶりのブルマー.....	二人だけの保健体育.....	誘惑の生徒指導.....	甘美な予習.....
279	208	159	106	72	24	4

登場人物

Characters

桑原慎也

(くわはらしんや)

整った顔立ちをした細身の男子生徒。童貞。

天霧観月

(あまぎりみづき)

名門私立高校の教師。慎也の従姉。理知的な美貌と扇情的な身体つきをしている。年下の男の子が好み。



女教師が生徒にひざまずいているということも、牡としての優越感を刺激してくれた。肉感的な美女を征服しているような気がして、肥大した亀頭がわななく。また、上から見下ろすと、ジャケットの胸元に豊乳の谷間を覗くことができる。ブラウスのボタンが外れており、たわわな乳房同士が窮屈そうにぶつかり合っていた。

笠裏を舐めなぞられる快楽ばかりでなく、女教師の淫靡な姿にも牡欲を刺激されて、慎也の男性器はさらに粘液を吐き出してしまふ。

「こうすると、亀頭の全てを舐め清めることができるのよ……」

観月は、唇を大きくゆるめて、亀頭の張り出しまでをくわえ込んだ。広がった笠部分から頭頂の割れ口まで吸いしごく。実生活では決してないほど大きく唇を広げて、ぬっぺりと肥大した亀頭をしゃぶり上げたのだ。

「はあうっ……」

歓喜の呻きとともに、慎也は身をのけ反らせる。

亀頭の裾野から頂までを唇で吸いしごかれ、男根は快楽に跳ね悶えていた。肉胴を手でしごかれたり、肉茸を舌で舐めまわされるのも心地よいが、粘膜で包み込まれるようにして吸いしごかれる快楽はまた格別だ。

「あああ……はうっ……あふうう……。き、気持ちいいです……」

女教師の唇は、亀頭の張り出し部分までをぬっぼりとくわえ込み、頭頂部までをしゃぶり上げてくれる。唇全体の粘膜で亀頭を締めつけられ、ねっとりとしごき上げられるのだ。亀頭は喜びに悶え、欲望の粘液をびゅるびゅると噴き出す。

（女の人のあそこって、こんな感触なのかな……）

熱い粘膜で喰い締められ、心地よい吸引とともにしごかれる感触。

童貞の慎也は、その感触から女性器の味わいを想像するしかない。

（な、何だか……姉さんの唇が……あそこに見えてきちゃったよ……）

憧れの女性である観月が足元にひざまずいて、肥大した亀頭を唇で吸いしごいている。鼻にかかった呻きをもらしながら、何度もしゃぶり上げている。

まだ女性の身体を知らない慎也にとって、それは性交そのものだ。

（姉さんと……しているんだ……。学校の中で……）

従姉であり、憧れの年上女性であり、知的美貌の女教師でもある観月。

彼女の口唇と交わっているのかと思うと、興奮のあまりに我を忘れてしまいそうだ。心臓はどくどくと鼓動し、それに合わせて男性器も力強く脈打っている。

「どうかしら？ 唇全体を使つての『指導』は？」

観月は、亀頭から唇を離さないまま、上目づかいで尋ねた。

「は、はい……。とつても……。効きます……」

その言葉通り、そそり立つ肉柱は涙を流している。悔悟の涙というよりも、喜びの涙だ。強ばりきった肉胴を白指でしごかれ、裾広がりの亀頭を唇でしゃぶり吸われ、頭頂部の割れ口は歓喜の牡汁をあふれさせていた。

「本当かしら。慎也くんのもの、指導しても指導しても、反抗的な態度を取り続けているわよ。こんなに猛々しくそそり立って、しかも笠を広げて威嚇してくるわ」

非難がましい言葉とは裏腹に、観月は妖艶な微笑を浮かべている。眼鏡の奥にある瞳を潤ませながら、亀頭の鈴割れに口づけをした。上目づかいで慎也の表情をうかがいつつ、亀頭の縫い目部分を舌先でちろちろと舐めくすぐる。

情けない悲鳴を上げながら慎也は快楽に身をのけ反らせた。

「反抗的な態度を取り続けている『子』には、もっと厳しい指導をしてあげる」

眼鏡をかけた女教師は、亀頭をついばんだり舐めしゃぶったりしながら、自らの胸元に手をやってスーツの第一ボタンを外した。スーツの内側で窮屈な思いしてきた乳房が、弾けるように飛び出してくる。さらに観月はブラウスをはだけ、ハーフカップのブラジャーをずり下ろして、豊かな乳房をあらわにした。

「手の指導で聞き分けられない子でも、乳房での指導になら従うでしょう」

目を見張るほどに大きな乳房は、ジャケットの胸元から挑発的に突き出している。女教師にふさわしく堅い衣服を着ているだけに、そこからあふれ出た豊乳の淫らさが際立っていた。たわわな乳房は前へぐんと張り出しており、豊かさを誇示している。その頂にある乳首はびんびんに勃起していて、今にも乳汁を噴き出しそうだ。

眼鏡といい、シックな黒スーツといい、知的な女教師という印象の観月。

だが、胸元よりこぼれ出ている乳房は、彼女が生身の女であることを示している。その肉体には血が通い、時には性欲を抱くということを、象徴しているかのようだ。

「こうして挟んで……」

観月は、亀頭の先端部分を唇でついでみながら、自身の豊乳を両手ですくい上げた。乳房同士がぶつかってできる谷間に、そそり立つ男性器を挟み込む。

(はううう……。とろけそうにやわらかい……)

つい先日は豊乳のやわらかさを顔面で味わったが、今は男性器で堪能していた。そのやわらかさたるや、肉柱の熱だけでもとろとろに溶けてしまいそうなほどだ。乳肌はしっとりとしてなめらかで、固く泡立てた生クリームを思わせた。

「徹底的にしごくのよ……」

たわわな乳房で男根を左右から挟みつけられ、やさしくしごき上げられる。

男の器官は快楽に悶え、牡汁を吐き出しながらびくびくと脈動していた。

「あふっ、あああっ……あつ。き、気持ちいいです……」

豊乳でしごき上げられるのに合わせて、慎也は歡喜に身をのけ反らせている。

ひざまずいている女教師は、豊乳の上げ下げを次第に速めていった。すくい上げた乳房を荒々しく上下させて、そそり立つ男根をしごき抜いている。

さらに、丸々と肥大した亀頭に唇をかぶせて、ぢゆるぢゆると吸引した。

「んっ、んんっ、んううう……。慎也くんのもの、おいしいわ……」

眼鏡の向こうにある瞳は牝の淫情に潤んでいる。

亀頭にみなぎっている牡欲にあてられたのだろうか。タイトスカートに包まれた尻肉をもどかしげにくねらせている。股間の底、女陰がうずうずすると言わんばかりに、魅惑の丸みをした美尻をうねり舞わせていた。

「はあっ、あふうう、ううう……。そんな、両方されたら、んああ……」

乳房で挟み込んだのしごき指導に加えて、唇や舌を駆使しての吸引指導までされ、慎也はいいように啼かされてしまう。

淫猥な指導の矢面に立たされて肉柱は、粘液を吐き出しながらのたうち跳ねている。観月の唇で吸われれば吸われるほど、亀頭は欲望の先汁を湧き出させた。

節くれ立ってごつごつとした肉胴は、やわらかな乳房にくるみ込まれたことを喜んで、荒々しく暴れまわっている。

「んううっ、んっ、んはああ……。し、慎也くんのが、胸の間で暴れてるの……。おちんぼで……胸を犯されているみたい……あっ、あんっ……」

自らの手で乳房を上げ下げしながら、観月は熱い喘ぎをもらしていた。

たわわに実った豊乳は、男根の幹部分を余さず包み込んでいる。とろけるようにやわらかな乳房で左右から挟みつけ、なめらかな乳肌でこすり上げることによって、反抗的な態度を取り続ける肉柱に『指導』をしているのだ。

しかしその指導は、男性器によって乳房がこすられることをも意味した。

乳房で挟み込んでしごき上げるたびに、男の象徴のたくましさや荒々しさを乳肌で味わわされてしまう。肉柱が帯びている熱や、鋼のような硬さや、激しい脈動ぶりを、なめらか美白の乳肌に思い知らされる。

「んああ、あああ、ああん……。そんなに暴れちゃ……ひっ、ひあっ……」
教え子の足元にひざまずいたまま、女教師は身をくねらせていた。

豊かな乳房を駆使することで荒ぶる男根をどうにか鎮めようとするのだが、観月が豊乳を上下させればさせるほど、肉柱の脈動は激しさを増す。

「な、何だか……胸がおかしいの……。乳首が、うずうずして……」

男の象徴に満ち満ちている牡欲は、観月の中の牝を目覚めさせていた。肉感的な肢体は発情し、肌という肌が性感帯になっているのだ。

その影響は乳房にもおよんでいて、豊かなふくらみはその全てが性愛の器官と化している。きめ細かな乳肌は、触れられただけでも快楽を感じるまでになっていた。元々から敏感な乳首は、陰核にも劣らないほど感じやすくなっている。ぴんぴんに尖り立って、どんなわずかな刺激でも貪ろうとしていた。

「ふああ……あつ、あああ……。お乳が……。お乳が噴き出そうなの……」

乳房を上げ下げすると、その頂で尖り立っている蕾は慎也の下腹部にこすられる。

そのたびに、紅色の突起は喜びにわなないた。その快楽は見えざる乳汁となり、わななきに合わせて蕾から噴き出す。

勃起した乳首はひくひくと脈動し、不可視の乳汁をほとばしらせている。

眼鏡をかけた女教師は、そんな妄想に囚われていた。

「あひっ、ひいっ、あんっ……。慎也くんのおちんぼ……。気持ちいい！」

乳首で奏でられた快楽は、官能の旋律となって豊乳全体に響き渡る。乳房から広がった快楽だけで、二十五歳の女体は歓喜を極めようとしていた。

「私の方が……先に……いっちゃいそう……」

もはや、男性器に指導を施しているといった感じではない。男の象徴をご神体としてあがめ、うやうやしく奉仕し、身も心も陶醉していた。

「ぼ、僕も……いきそうです……。出しちゃいそうです……」

椅子にかけたまま慎也は背をのけ反らせている。

これまでは金縛りのように身を強ばらせていたが、湧き上がる快楽に突き動かされて、ひとりでに腰が躍動し始めた。大股開きで股間を跳ね上げ、猛り狂った牡肉杭で豊乳の谷間をえぐり上げる。

「ひっ、ひいつ、んああああ。む、胸を……犯されている……。慎也くんのおちんぼで……胸を犯されているの……あつ、んひい、ああん——」

乳房の合わせ目を突き上げられ、女教師は官能に啼き悶えていた。乳房と乳房とがぶつかって形づくられた谷間を、まがまがしい肉柱にえぐり上げられているのだ。そのたびに、成熟した女体は喜びにくねっていた。

タイトスカートの中では、太腿同士をもじもじとこすり合わせている。乳房でかき立てられた快楽は股間の底にまで伝わり、女陰花をうずかせていた。秘め花卉は左右に咲きめくれ、女肉穴はきゅうきゅうと収縮して蜜汁をもらしている。

「そ、そんなに激しくしないで……。お口でしてあげるから」

ひざまずいた女教師は、陶酔の表情で亀頭へむしゃぶりついた。

まがまがしく笠を広げている亀頭へ、舌と唇とを捧げる。ぢゅるぢゅると唾液音をさせながら吸いしごき、うっとりとした顔つきで舐めまわした。

「あああ、おいしい……。慎也くんの、とつてもおいしい……」

鼻を鳴らしつつ亀頭を貪り吸い、タイトスカートに包まれた美尻をくねり舞わず。女陰に渦巻く牝欲に突き動かされて、尻肉を揺すらずにはいられないのだ。

「姉さん……。僕、もう、我慢できませんっ……」

慎也は、歡喜の呻きを上げながら、憑かれたように腰を跳ね上げている。

腰にわだかまっている牡欲は、もう抑えきれなくなっていた。ずっと吐き出せずいた精液は極限にまで濃縮され、肉柱の根本で煮えたぎっている。雄々しくそびえ立つ男性器は、噴射の前触れのようにびくびくと脈打っていた。

「あああ、はあ、ああん！ 私も、わたしも……。いっっちゃううっ！」

観月の腰ふりは一層のこと激しくなっている。タイトスカートの内部は、蜜汁の匂いで充満していた。下穿きはぐっしりと濡れていて、失禁したかと思まごうばかりになっている。その奥では、しとどに濡れ咲いた女陰花が牝欲に悶え泣きしていた。

びゅぶつ、ぶぶびゅつ！ ぼびゅ、ぶびゅぶつ……びゅぶぶぶぶつ！

亀頭の鈴割れから精液がほとぼしり、観月の喉奥深くにぶちまけられる。

「んっ、んんうっ、んうううう！」

おびただしい量の精液を口内に注ぎ込まれて、女教師は切迫した呻きをもらした。濃厚で粘ついた牡汁にむせながらも何とかして飲み下そうとする。眼鏡の向こうでまばたきを繰り返し、小鼻をふくらませつつ、懸命に嘔下えんげを試みている。

だが、溜めに溜め込まれた精液は、女教師の想像をはるかに凌駕していた。

「んあっ、あひいっ！ こんなたくさん……ふあっ、ひいひい！」

飲み下しきれずに、思わず亀頭から唇を離してしまう。

ぶぶびゅつ！ びゅぶぶつ……ぶびゅつ、びゅぶぶぶ！

観月の唇が離れた瞬間、精液が勢いよく噴き上がった。

灼熱の白濁液は宙を舞い、知的美貌に降り注ぐ。結い上げられた黒髪にも、薄いレズルの眼鏡にも、顔面の全てに精液がべつとりとこびりつく。

「ふああ、あつ、はあああッ。眼鏡に、かかっちゃう……あひい！」

とはいえ観月は、顔を背けようとはしない。

恍惚の表情でかすかに顔を上向け、白濁の牡汁が降りかかるにまかせている。



慎也はそこへ手を差し伸べる。桃のような丸みを手のひらで軽く撫でた。

「あああ……んああ……」

ごくやさしく撫でただけなのに、ブルマーに包まれた美尻がひくんと引きつる。

「こうすれば、お尻の割れ目までも正確に……」

豊尻の中心部に指腹を押し当てると、布地の抵抗感だけで沈み込んでいった。そのまま、ブルマー越しに尻の割れ目をまさぐり上げてやる。

「ひっ……あつ、あん！ そんなところまで……こすらないで……」

観月は、艶めかしい喘ぎをもらしつつ豊尻をうねりまわしていた。

「ブルマーが、お尻に喰い込んじゃう……」

割れ目をまさぐる手から逃れようとしているようでもあり、年下の男の子を挑発しているようでもある。いずれにしろ観月は、自らの手で少年の手を払いのけようとはしなかった。美脚をよじり合わせたまま、その場で尻肉をくねらせているばかりだ。

「んああ、んっ、ああん……。お尻がむずむずして……あんっ……」

ブルマー越しに尻肉の谷底をこすられるたび、女教師は股間を前へ突き出す。妖しい官能を奏でられて、我知らず恥ずかしい腰づかいをしてしまうのだ。

「そんなに腰を振るなんて、やっぱりブルマーを穿いて興奮したんですね？」

「別に興奮しているわけじゃ……ああ……」

慎也は、観月の肉感的な肢体へ背後から抱きついた。腋の下に腕を差し込んで、豊かなふくらみを手のひらいっぱいにするにすくい上げる。

「でも、乳首がこんなに尖っているんですよ」

体育シャツに浮き出た突起を、指先だけで軽くつついた。羽毛で掃くかのようなやさしさで、乳首やその周辺を撫でまわす。

「あつ、ああ……んああ。そんな……くすぐりたい……」

眼鏡をかけた女教師は、乳首をさいなむ妖しいくすぐったさに女体をもがかせていた。慎也の腕の中で、むずがゆさに身をよじっている。

布地を隔てることによつて、指先の刺激が妖美なくすぐったさに変換されるのだ。身体を隠すための体育シャツではあるが、張りつめた布地は指先の感触を増幅させていた。着用主である観月を裏切つて、その女体を責める側に荷担している。

「乳首が……あああつ、んっ、ひゃうっ！」

純白の布地にできた尖りを慎也の指先に弄ばれ、観月はふしだらなよがり啼きを上げていた。勃起した乳首は歓喜に悶え、びくびくと脈動している。

「くすぐられただけでこんなに悶えるのなら、こうすればどうなるんでしょうね」

慎也は、体育シャツに浮き出た尖りを摘み上げた。

ぷっくりとふくらみきった乳首を指腹で揉み転がし、左右交互にしごき上げる。

「ひっ、ひいっ、あんっ！ 乳首、意地悪しないで……しごかないでえ」

肉感美に恵まれた女体をくねり悶えさせながら観月はよがり啼いていた。

執拗なくすぐり責めで勃起させられた乳首は、いきなり直接的な愛撫にさらされて快楽に脈打ち跳ねている。むずむずとしたもどかしさが一気に快楽へと昇華し、ふくらみきった蕾をわななかせていた。

「お乳が、お乳が出ちゃうの……あああっ、んあああ——」

ぴんぴんに尖り立った乳首からは、快楽という不可視の乳汁が噴き上がっている。

脈動とともに白濁の汁を噴出しているという状態は、男性の射精に酷似していた。観月の意識内では、左右の蕾から射精さながらに乳汁をほとばしらせているのだ。

快楽のあまり、女盛りの肉体はじつとしていられない。成熟した肢体をくねらせ、ブルマーに包まれた豊尻を左右に揺すっている。背後に立つ慎也の股間へ尻肉を押し当て、蠱惑的な縦回転でズボンのふくらみをこすっていた。ふしだらな腰づかいで男子生徒を挑発するとともに、射乳の快楽に身を悶えさせている。

「あひっ、あッ、ああん。乳首だけで……いっっちゃいそう……」

シャツの裾からへそがはみ出ているのを気にする余裕もなく、ブルマーの股ぐりから尻肉はあふれているのを恥じらう余裕すらもなく、慎也の指づかいに翻弄されていた。勃起した突起は喜びに脈動し、快楽という名の見えざる乳汁を噴き上げている。

「姉さんって、本当に乳首が感じやすいんですね」

慎也の指先で乳首を固定されているため、観月が身をくねらせると胸のふくらみだけがゆさゆさと揺れ弾んでいた。乳房の感じやすい蕾を固定されているという状況が、緊縛の被虐美にも通じる妖しい美しさを醸している。

「でも、まだいかせてあげませんよ……」

慎也は、執拗かつ繊細な指づかいで左の乳首を責め廻りつつ、自身の右手を観月の下腹部へじわじわと這い下ろしていった。

「こっちの感度も調べないといけませんからね」

シャツの裾からはみ出ているへそを、やさしく撫でまわす。へその縁を指先でなぞるようにして、敏感な部分をくすぐってやった。

「あつ、はああ……ああん……。くすぐりたい……」

腹部の中央にうがたれたくぼみは、他人が触るようなところではない。そこをねちねちとなぞりまわされて、観月は女体を左右にくねらせた。

「女性のおへそって、何かそそられるものがありますよね。亀頭をあてがって、こすりまわしたくなるっていうか……」

ブルマー姿の観月をあおむけに組み敷いて、粘液にぬらめいた亀頭でへそをこすりまわす。女性器に見立ててへそを貪り、煮えたぎった精液をぶちまけるのだ。

それを想像すると、ショートパンツの中で男性器がいなき跳ねた。

「慎也くんったら……いつの間に、そんなに変態的な趣味を……んあぁ——」

従弟の変態的な趣味をなじりはした観月だが、彼女自身も興奮を覚えているようだ。指先でまさぐられるたびに喘ぎをもらし、くすぐったそうに腰をくねらせている様は、へそが性感帯になってしまったかのようなのである。

「別に、おへその感度を調べようとしていたわけじゃないですよ。おへそを調べるのはついでで、もっと下の方の感度を……」

へそからさらに手を這い下ろして、ブルマーの底部にまで指先を伸ばした。

お尻の魅力的な曲線を克明にかたどっていたブルマーは、股間の丸みをも正確に描き出している。お尻ではその割れ目までは表現しきれていなかったが、股間では女陰門の盛り上がりが浮き彫りとなっていた。太腿同士を閉じ合わせて、わずかに尻肉を引き気味にしている今、女陰門のふくらみが顕著にあらわれている。

観月の女陰門は肉厚のため、楕円形の盛り上がりがくつきりと出ていた。その中心部を、慎也の指先が縦にすべり下りる。

「んああッ」

短い喘ぎとともに観月は女体を跳ねさせた。

二十五歳の成熟した尻肉が押し込まれているため、中学時代に穿いていたブルマーは張り裂けんばかりに伸びきっている。体育シャツの胸元と同じく、張りつめた布地は指先の感触を増幅させていた。慎也の指先がブルマーの底部を軽くすべっただけなのに、着用者である観月には、繊細で甘美な指弄に感じられてしまう。

「軽くこすっただけなのに、こんなに感じているんですか？」

紺色のブルマーにできた盛り上がりをも、慎也は指先で何度もこすった。女陰門の合わせ目と思しき中心部を上下になぞったり、女芯があるであろうところを小刻みにくすぐる。そのたびに目の前のポニーテールが揺れ、よい香りが漂ってきた。

「あつ、あああ、あん。慎也くんが、えっちなことをするから……」

張りつめた化繊地の上を指先がすべるたび、観月はくすぐったさにさいなまれていく。確かにブルマーは、恥ずかしいところを視線から遮っていた。だが、指先の感触を増幅してしまい、着用者に妖しい愉悅を味わわせている。

もどかしい刺激をしつこく与えられて、ブルマーの内側では女陰花が咲きほころびつつある。ふつくらとした肉唇はしどけなくゆるみ、紅色の秘花弁は左右にめくれていた。姫穴は何かを訴えるかのように収縮して、熱い蜜汁を吐き出している。縦長の陰鞘からは女蕾が顔を覗かせ、もつと直接的な刺激をねだっていた。

「あそこがむずむずするの……。くすぐったくて……。ああん……」

ブルマーの表面を指先がすべるのに合わせて、観月は尻肉を揺すり舞わしている。

肉づきよい美尻をうねらせ、背後から抱きついていている慎也の股間をこすっていた。豊かでやわらかな尻肉は、ブルマーを穿いたことで適度な引き締め感を感じている。剥き出しの時とは趣の異なる感触を味わわれ、男性器はびくびくと脈動した。

「感度検査はこれから本番ですよ」

ブルマーに浮き出たふくらみへ、慎也は指腹をめり込ませる。やわらかな盛り上がり指腹を押し当てたまま、上下に揉みまわしてやった。

「んああ、ああっ、あひいいい！」

観月の唇から歓喜の啼き声がほとばしる。くすぐり責めで悶々としていた女陰花にとつて、指腹をめり込まされての上下動は刺激が強すぎた。牝欲のわだかまりが一瞬にして官能へと変貌し、二十五歳の女体を隅々まで駆けめぐる。

「あつ……だめ……。あそこが気持ちよすぎて、立っていられない……」

きついブルマーの股ぐりからは、男好きのする美脚が伸びていた。男ならば誰でも頼りたくなるような脚は、歡喜の脱力に見舞われて細かにふるえている。

「大丈夫ですよ。僕が支えてあげますから」

慎也は、左手で観月の豊乳を鷲づかみにするとともに、強ばりきった股間を豊尻へ押しつけた。そうやって知的美人の身体を支えながら、彼女の股間への指弄を一層のこと激しくする。ブルマーに浮き出た楕円形へ指腹をめり込ませ、こねまわすようにして荒々しく責め立てた。女芯があるのであろうところに指先をあてがって、細かに振動させる。女性の身体で最も感じやすい部分を集中的に淫弄してやった。

「あひつ、あああ……あんッ！そこは、そこは本当に許してえ」

女の弱点とも言うべき箇所を徹底的に責められ、女教師はあられもないよがり啼きを上げてしまう。ブルマー越しの指弄で官能を奏でられ、肉感的な肢体をくねらせていた。桃のような美尻を慎也の股間に押し当て、しきりとこすりまわしている。素肌の美脚は、立っていることすらままならない様子でわなないている。

「気持ちよすぎて……腰が抜けそう……あひつ、あああ」

眼鏡をかけた知的美女は、きついブルマーに包まれた美尻を淫らにうねらせていた。

下穿きの中では女陰花が悶え泣きしている。陰鞞から剥け出た肉芯は、少年の指先によって正確にとらえられていた。厚手の化繊地と薄手の下穿きとによって隔てられているとはいえ、指先の淫らな蠢きが伝わってしまう。

「んあつ、あつ、ひいっ……。そんなにこすらないで……」

快楽に悶えている女芯のすぐ下では、女肉穴が欲求不満に喘いでいた。自分も指でまさぐって欲しいとばかりに、きゅんきゅんと収縮している。慎也の指をくわえ込みたいとばかりに、物欲しそうな喰い締めを繰り返していた。

いや。本当はもっとたくましいものを求めている。

表立って口にしがたい欲望を代弁するかのようになり、女肉穴はしとどに蜜を吐き出していた。牝の欲望が熱い粘液となって溶け出し、ぢゅくりとあふれている。

女陰花へ直に触れている下穿きは、おしっこをもらしたかのように濡れそぼっていた。ブルマーの内部は蜜汁の湿り気と臭気とで蒸れ返っている。発情の証である女汁が体温で熱せられて、濃密な香りを放っているからだ。ブルマーが小さすぎるので股ぐりも腰まわりもきつく締めつけており、どんなに腰を揺すっても内部の空気は外にもれない。蜜汁の生臭い匂いは溜まってゆく一方だ。

「あれ、ブルマーが湿っているみたいですよけれど？」

慎也の指腹は、厚手の化繊地に湿り気を感じ取っていた。

「そんなこと、あるわけ……んああ……」

ブルマーが紺色をしているため、濡れ染みは目立たない。しかし、女肉穴のあたりをこすりまわすと、わずかながら湿り気が感じられる。厚手の化繊地を湿らせてしまうほどに、観月は発情汁をもらしているのだ。

「ブルマーの上からこすられると、いつもとは違う快楽が感じられませんか？」

「そんなこと別に……ブルマーだから興奮しているわけじゃ……ああっ——」

否定の言葉を最後まで言い切ることできず、指腹の蠢きにより啼かされてしまう。ブルマーの上から女陰門を揉みこねられるたび、ふしだらな声を上げていた。

「そのうち、ブルマーを穿いただけであそこがうずくようになりますよ」

からかいの言葉をかけながら慎也は指腹を蠢かせた。

「んああ、ああっ、はあう……。そんな恥ずかしい性癖を植えつけられたら、生徒たちに合わせて顔がないわ……」

眼鏡をかけた女教師は、女陰門をいたぶる指先から逃れようとして、尻肉を後ろへと引く。しかしそこには慎也の股間が待ちかまえていた。ショートパンツの股間部分には、太い筒状の盛り上がりが浮き彫りになっている。

観月が尻肉を揺すりまわすたび、円筒形の強ばりにこすられた。ショートパンツの中にあるそれは、観月の女体を貪り抜こうとして牡欲をみなぎらせているのだ。

「慎也くんだって、おちんぽをこんなに硬くしているじゃない……。ブルマーで興奮しているんでしょ……」

「もちろんそうですよ。姉さんのような成熟した女性がブルマーを穿いている姿、すごくそそられます」

荒い息づかいでそうささやきつつ、自らの股間を前へ突き出した。ショートパンツの中でそそり立っている男性器を、観月の豊尻に押しあてがう。股間をすりつけるようにして尻肉をこすり上げてやった。肉づき豊かな尻は、ブルマーを穿くことによつてほどよく引き締まっている。その感触に、亀頭は歓喜の粘液を吐き出していた。

「あ……硬くてたくましいものが……お尻の割れ目に……あん、はあああ！」

尻肉の合わせ目をまさぐり上げられるたび、観月は女体を反り返らせている。

牡欲にみなぎる男根で尻肉の谷間をこすられると、成熟した肉体の芯にまで官能が響き渡った。全身に快楽が駆けめぐり、股間の底に咲く秘花をうずかせる。

「ブルマー姿にそえられるだけじゃなくて、ブルマーに包まれたお尻もすごく気持ちいいですよ。こすっているだけで射精しちゃいそうです」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 11月発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!